

筋切  
通切

ゆくゆくはに遊ぶの草木の志はるる哉  
さぶら風を嵐といふ草薙

涼草帝御園忌

ありき

らきふく霞の谷々かた々々照りの  
他はくもくやまはらね

宇治山の喜撰ももはかぬくして  
かたむきりたつたはらむく秋月

をききしに曉あつさきの雲にありくさうこそ

よみかは都の辰之鹿が鳴なをを

活よと人きゑるなりわ

清きうむなくまこいしはばかれぬを

よはしとよきと

小野少所もさう人の衣通煙の流なわ

あはれちるやうよてつよらぬさはら

よよをんなのしやめらうとらんあろ  
ごごご  
しよつとめは如おそがれが  
はらう

おもひてぬれを千人のみえん夢と知とハ  
とめは良しうを

いろみえでうつろふものは老年の人の心のをれ  
しよごめらう

わがぬれをよまうしとまの抱き終り  
あはれさき人水

むしりがおきふ

衣通姫のこゝろ

久保ヨ

わづきさらり可来来あなま小何サハの

くまののあまの金カネてさうし母

たかとしれくろあねはあまのこゝろおし

くまのうまおつろふ人の花のふさふさ

あまのこゝろ

寛永元御時后宮の尋今上

源宗干

とらふはさうらまされうとわしはさうらまされ  
ひまゆと一本のいづれませむと

奇たてまられとおほさうらむ時

てまらむが

ま母さし

わらむとさうらまされうとわしはさうらまされ  
のらむとわしはさうらまされ

梅花をわけて 後

东三條左大臣

源常

うしひめのうせまぬわてあえぬの花  
をわけてわけてむ老隠や東

題名

後

河原のこのあはれをわけてわけてわけて  
あはれをわけてわけてわけてわけてわけて

月を名に花を名に善哉と来  
本大虚を法入字の燈を来に  
うら即希市刊を来と

月を名

はれみれ来  
うら即希市刊を来と

題ふ知

情人ふ知



あはれおまの風なほれつゝにさへ  
あはれおまの風なほれつゝにさへ  
あはれおまの風なほれつゝにさへ  
あはれおまの風なほれつゝにさへ  
あはれおまの風なほれつゝにさへ

藤原菅根

あはれおまの風なほれつゝにさへ  
あはれおまの風なほれつゝにさへ  
あはれおまの風なほれつゝにさへ  
あはれおまの風なほれつゝにさへ  
あはれおまの風なほれつゝにさへ

花の色はうらさけなふらたにわ。  
うらたにあらぬあせまらに

仁和御時中將の御息所の家

吾命をいとしらる時

まはは法師

惜と打しよるあふりによるれあふし  
ちるらにわらうとあは

こわろ ヤアコエ

志願ぬ山越りなきはたの

あつちけりにつくくつはけり

おきし

捧らふものよきをらぬ名道も七  
ちんちんをらぬをりけり

寛平山時寺合のう

古今味影集局第口

秋上

秋意日深了

藤原敏行

秋来と幼心と老心と  
平之に見たりと

え風の音のよき驛馬がれぬる

あまぬさるもうらみ男志のとも

河の道冬より新あさるにとも

く 懐く

あまぬさる

河の涼しさを春うらみすれな

み

とあまぬさるのよき

あまの風は老るも金のそとにゆき  
る惟つ玉は清きをそとにそとる

題不知

讀人不知

我門はいな負鳥のたぐひ帯をそとる  
風のよはうかへそとる

糸きりもたぐひめをそとる白露の色  
取ら木こし紅糸教無用

若くは此の如くか  
伊予守となす  
我を寛と云ふ  
此下善し  
名付る事

此守或人のいふ  
寛平此何底字れ  
吾合し

藤原菅根

あまのうせにこゝろをさほくあまのうせに  
天れとわさるる御まをなさる

かみのちまけつを侍あつ

元河内守

あまのうせにこゝろをさほくあまのうせに  
かまのちまけつを侍あつ

惟の親とめあまのうせに

元河内守



たまはるはきりてはなれ  
きりてはなれ

題不知

讀今

たまたまはきりてはなれ  
きりてはなれ

名山一たまたまはきりてはなれ

いろりけり 秋の先をば一年の二般に  
まふと流とてや見れ

仁徳のよきとてや なるにそり  
ましまりしもの

平定文

秋をばきりし時 存せしれ又これを見  
都るるるに 人のよきをば

あとのまじきとれ 見れをば  
うらりやみりし せり



時風のよき 龍田河の 紅葉も  
うれたる 形も なるも なるも

素性法師

お茶はのちうれてとありら みるに  
くれなるも なるも なるも なるも  
憧る 秋の 家の なるも

葉年

ちはやさし なるも なるも なるも  
れなるも なるも なるも なるも

同人の家は吾人なり

新行 新也

我を流るる事しらば吾人なり  
未のしりあめらるる事なり

中書

甘南脩のうむらぬ心を新行名錦  
裁着心地よりすれ

此のうむらぬ事をしりて新行



かませよは冬よりわひーせいあよん  
人かしくせしうれぬきん  
影不ら 倭人ー

おほそこのつものひーせいあよん  
まらみー水やまらーかかろ

ゆきかろーくろーあひーのー  
ーのーゆーあかー

行々書盡てあら南吾屋の薄おし  
を八女

なるん希新う白雪

志ほのおとこ一丁のしをたすむひらね  
ちみりみよはやちよとそをたうく  
みよはみよるや<sup>そち</sup>千よたともそん  
とちめおんそハサしひいてこそよ

遍照像よ七十の賀せさをほ

とち

仁和寺

かきつとそしおんもたうらう  
まろやちちよありやしきうた



古今味歌集卷第十一

恋一

題不知

讀人不知

古  
今  
味  
歌  
集  
卷  
第  
十  
一  
戀  
一  
題  
不  
知  
讀  
人  
不  
知

文のみわゆるのこころをたゞしむるは  
たゞしむるあはれをたゞしむるは

人の華をたゞしむるは

らんとしむるはに徳をたゞしむるは

悲ふるれのはは山とたゞしむるは  
若くしむるは

比喩のたゞしむるは

律師樂仙

和のたゞしむるは乃ち徳をたゞしむるは  
うらむるは

雲林深親之舍利堂に於て  
登臨し歸臨するに櫻の末下に

通西

山嵐とさくらと  
さくらとさくらと

幽仙

さくらとさくらと  
さくらとさくらと  
さくらとさくらと

仁木の帝の親日なまきり可なり  
時あるの瀧石魂しよなまきり可し  
ちる日  
善善法師

あつひしつわろくならみきこ、ちるよそ不  
水まきりもくち志まきはみゆらん

雷鳴ききめつて脚みよなまきり  
今ある雨のわかけらよきりさあき  
まよいつつらなまきり

秋萩の花をばあめにぬらさとしよ  
るをばまじりてをさすやせし人

うら

重徳のり

幸むん人のこころをさすわよひさ  
ぬらなみそやうこころ

かきみのおちりよこころあひげしや

わづれをさすよ  
秋佐

和るれさうけしをさすよ  
あねみねさすよ  
なごころをさすよ

ふれもろはぬわなうらん

なみやこころ

少所

おまのあやうきやうもわ  
しはみやこころよのわななや

みやのは

てゆよ

わらわのころうきやうもわ  
鏡のうきやうもわ

よまは

きし

あはれものからとをれおとすも  
のいふまゝとすくはし

うたの

集巻

なまはれものからとをれおとすも  
ゆきよのちとわらわを

あはれ

せしむる 集部

おろ  
不入此目錄之尋

よのつはきけはちとほりし水のき  
あはたきしきもぬる色

たうつとれよたうつとけもありと云をなとわ  
とんのおらとともなうし

やうらうらふたふたのたうのきなる  
けうらふたふたのたうの



しきおらうしき海人釣縄打追々若と  
のみやおしりまさん

りこころはなまらふりこをたしめ  
物忠時の我みゆもや

種一枯えしをうも移はおれまや  
恋を恋はあはさらゆや

胡菜、起河西端の處、野見淨



わらわしひとにそはぬまのゆへ

うもひのほらわまのころなまおしつゝ  
なまうまのほらうらなてまゆらん

うもひのほらうらなてまゆらん

たうらてまゆらん

うもひのほらうらなてまゆらん

れらたのほらうらなてまゆらん



うらや

なるゆゑのをなほし  
いひ多きうらや  
われとありひよ  
うらや

東岩

なほなるはなほ  
うらや  
うらや

はなほなるはなほ  
うらや  
うらや

此も一紙ぬれはしみのこころわひくれ  
わななきをばわれのこころさる

友判

事ごとくいそいそぬれはみれさるは  
まはりのまはりのま

紙恒

まはりのまはりのまはりのまはりのま  
まはりのまはりのまはりのまはりのま

楽

うけつめゆめさむらひたふらふ  
うけつめゆめさむらひたふらふ

善道列傳

樟らひらけを末巻の市よふらふ  
まきれらひのころは

新地

わらふをゆめさむらひたふらふ

みよのふしきおふしに  
きりかへしけし  
きりかへしけし

よみかへし

おしよにきりかへし  
九あきらのいりかへし

ちくのきりかへし  
よきりかへし

きりかへし





おしよしもかれな女人をいつきんあつては  
ぬれもあつていそそみぬ

懐人

いまはまゝいそそかれな女あつたのそを  
ひらみてやしのはせ

宗干

和れとせうれりやあつたのそを  
人のそとあつたはあつた  
わつたせとあつたつてあつた  
ゆつたあつたあつたあつた

あまのかりまよしじ、いのちのわらわら  
わらわら、や、なうあよまをばうらうら

稲葉

あひこぬしうはもわらわら、うらうらも  
わらわら、まられまられ、わらわら

寛永十脚時后宮のうらうら

菅野忠臣

え 智のめをえんをえんて 底字の所方  
ふ 切何美く又折る一 起に江ふ  
き てもあふ新令れ 吾 獲人とい  
和 比て加ふあ 年 御前ふえをい  
と、 古もいふも 以 者 喜 事 あり  
事 新令の 之 形乃 加へわるとお  
き 心ありとると 以 形を 新 者 藏人  
若 たらふ 小 積とて 事 なる

いかにふ月姑若は今を借つる  
糸たつたて人物と形をふを若た  
らふやまぬ葉なまを以て月を

是ふ言

借人しるは

あまの若らるるは月を借るは

礼者起つたては月を借るは

あまの若らるるは月を借るは

あまの若らるるは月を借るは

右原棟梁

土心らゆえ水物もふらふしあふ如く源也  
之を、一、毛老ふと云

同御時より水物ふらふと云ふ事  
之を、一、毛老ふと云ふ事  
之を、一、毛老ふと云ふ事  
之を、一、毛老ふと云ふ事

敏一胡

題ふ名

情人あら

ふきあやちちうららけ揃えらまなふ年いそ  
智名しとちおももか中一年の絶新名

われろくろひきしとゆあぬさしよ一若  
ましのひかおいそよつぬそそ





まてゆらさるはらまらしき

わめのはらぶららちたてめ

とらまらくのほらまらまら

あつたはらまらみららら

まらまらまらまらまら

はらまらまらまらまら

まらまらまらまらまら

まらまらまら

美心如石之堅  
心之堅如石之堅  
心之堅如石之堅  
心之堅如石之堅

心之堅如石之堅  
心之堅如石之堅

喜靜法師

都事之堅如石之堅  
心之堅如石之堅  
心之堅如石之堅  
心之堅如石之堅

心之堅如石之堅

在原リ年朝臣

とらふららほむまゆららるあはれなほおと  
とちあやう起るるえんたるもえん

布引の籠のをもとんや新讀多時

ふよゆらる

在原業平朝臣

わらふあはれなほおとららるあはれなほ  
らもあやうとららるるあはれなほ

有母とてくしをらるるを其年のさし  
地とてあつたるを其年のさし  
すめれ

平定文

うとく信名にまかすなりしとあもるは  
うとくあつたるを其年のさし

あまのつとくを其年のさし  
あまのつとくを其年のさし

屏風のまになる花を讀く

世々々

あまのりめしとよきこころしほちけう地ま  
ちこくちよおちかなるやまぬあまのりめし  
屏風のちまをよむとよきこころしほちけう地ま  
らる

坂と是則



古歌よきよの

子

子

ちけりやふかきよの  
よきよの  
乃みらるる  
乃  
乃

題ふら

んあのかんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
人來々々と歌雲居

まね

やうふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふ二一平

藤原朝り

幾れ甲を作新名つ保介、ふんふんふんふんふん  
長を朝菜、一平



七月六日織女の心を續く

中納言右近衛

ひびく〜〜〜まきと記こゝろをけはるや  
なまきと記こゝろをけはるや

竹枝

むら〜〜〜まきと記こゝろをけはるや  
いつはあまのた〜〜〜まきと記

おしなをよぶ人のこゝろはれんまゝにさう  
くはつてみるしうしな

おしなとおしなはれんまゝのこゝろのれんまゝ  
おしなをよぶしうしな

おしなをよぶしうしなをよぶしうしな  
おしなをよぶしうしな

おしなをよぶしうしなをよぶしうしな  
おしなをよぶしうしな

おしな

む失の花開ての後乃夢なれどや  
あり物よのこ人れ云藍

法皇の西行よ御守とらありて猿

山絶る川にふたを

新燈

わひくくに麻子老なうきくく足安乃  
山絶るわちうきくくはあきくわ

題不知

讀人不知

をを秋ふのともくはしそよふ<sup>わて</sup>志らふ川  
伏島の麻のまぬありわ

人のうしを去るゝいふるる。

しやうく<sup>し</sup>純者 其牛のま

ゆ<sup>し</sup>許<sup>し</sup>よ<sup>し</sup>ふ<sup>し</sup>あり<sup>し</sup> 法<sup>し</sup>る<sup>し</sup>か

ふ<sup>し</sup>か

あつ紗布久の起毛糸をきやあお冠を  
たつちをきうたふ如者乃折々名 あやふ 教

こ紗名函物如お何む

こ紗き冠乃とふ乃き

みあ教のやとあお冠をきやあ教ら、

ふ王冠の如きとてとる あやふ

こ紗き若くはをき若くは  
折何とる乃とあは若くは  
乃き

